

師弟の縁

大塚喜一

「教育はお互である」こは、師弟道を俱にする生活を通じて一貫せる眞理をその惠福の中に生かさるゝ教育者の無限の感謝の心境裡におごそかにも有難く體認味到して發せられたる言であると思はれる。人こ人こが眞に相和し得るは實に「道」に於てであり、このお互が相合して人格的に一體となり得る會點にその各々を刻々に生かす光が點せられる。親子間の慈愛と信順とはかゝる二人一體の間柄を事實に示せ得る基本的性情即ち『天性』である。この天性に率^{したが}ふ所に教育の大道も具現するのであり、人間はお互に私心を没して相手に盡すことによつて親たり子たり師たり弟たる自己の「己」を全うすることになるのである。この天性が如何程までに人性の上に夫々實現せられてゐるかに教育の實際の徹底度即ち「深さ」が觀られる譯であるが、その涵養振作は外よりの方法によるは末であり、當事者自身が自己の現在生きて居り生かされて居る人倫關係をその實踐履修によつて自ら明かに體認自得すること即ち自覺すること根本

である。親子の間柄程純眞無難なる清き心のあらはれはなぐ眼前の利害得失快苦等の私情我欲の起る餘地なき無我盡誠の行は眞實に天人合一の至境である。その無限の慈愛の顯理に於て「母は神の代行者」であり、その天真の信の發露に於て「子供は地上の天使」である。かくてこそ周圍の狀況の變轉する中を一貫して常に母は子に生き子は母に生き得るのである。反逆の子も親心の攝取に救はれ、冷酷なる親も天真の子心に悔悟するは、外より相手を相對的に見て相手の爲すだけ自分も爲すのではなく、内よりお互の眞の間柄を體驗してゐるところに自己の分即ち「自分」に生きてゐることを證す。この體驗に住する所に相手を自己と一體と觀じてその表面假現の如何にありともこれによつて自己の行を變ふることもなく、かくして「我が親」「我が子」は他との比較を絶して我との關聯に生きる絶對の存在となる。この元來肉身の關係に出生せる絶對關係がすべての人々に對して擴充せらるゝ時「人を相手にせず天を相手にせよ」と教へ

られたる聖言にも合するであらうが、凡人がこの境にまで進み得る内面的動機は即ち上述の社會と個人との一元に在する體驗であり、こゝに第三者の眼には報らるれざる無限の献身犠牲の如何にして存續せらるゝかを見ゆる行が當人にはその行そのものより直接受くる慰勞と歡喜とに絶えず自己を清新ならしむる根源を養ひ得てたゞ常に斯くせざるを得ざる純なる一道として顯現するのであると思はれる。

×

上述の一般論を幼兒教育者が我が身に當てはめることにするに、先づ幼兒達の我に對する天眞の『信』が直接第一義の問題となると思はれる。これをその根本より徹底的に述べ盡すことはこの小稿の及ぶ所ではなく且學理的論考よりも實際的説述によりなるべくわかり易く述べたいと思ふので、こゝにはおはなしに於ける話者聽者一體の眞景を實例としてこの稿を起す最初より筆者の念頭にありし所を説明するの一助たらしめたいと思ふ。

×

子供と俱におはなしを樂んでゐる時、ガタンと戸が開いて人が入つて來た。この時、子供よりも自分の亂れる事が恐ろしい。ハッ！とした途端、一寸した怒り・不安・焦慮等のこんがらがつた氣持が自分の心を亂し曇らせる。そして今迄の状態にまで復歸するのに幾何かの時が空費され或は

それが甚だ困難となる。その爲に子供が亂れるのだ。我等の相手は今入つて來た人ではない。自分の話に聽き入つてゐるこの子供達と語つてゐるのであるから、この子供達と自分との忠實なる眞劍なる心の感應共鳴こそ語る私の當面の肝要事たるべきである。一度思ひをこゝに致す時、外的な妨害は直ちに解消し得べき偶發事に過ぎず、その爲の一時的な動搖が容易におさまらぬ眞因は實に話者自身の心の分裂混亂にある事を悟るであらう。子供達はすぐにお話の世界に歸つて聽かうとするのに話者の心が話す事以外の成績効果等の餘所に奪はれて今迄の如く純一になり得ないことは實に情無い。

故に、此際最も大切なのは話者自身の心の平靜でありゆるぎなき態度である。ペスタロッチが「生活の平靜、即ち内心の秩序の源泉」と云つた眞理は此處にも當てはめる事が出来る。子供達と自分が一つになつてゐる、「おはなしの世界」以外の何者をも容るゝ餘地なきまでの眞實なる心の態度が大切である。

斯く云へば話者の多年の經驗や熟練によつて妨害を乗り越えて進むが如く解せらるゝかも知れぬが、如何に話の上手な人であつても若し子供に話を求めて聽かむとする信順なる天性が動き出して來なかつたならば到底大人の力であるに純眞無雜な態度できかせ得るものではない。外的妨

害により子供達の注意が亂れかゝつた時、話者の技量を必要以上に發揮して過度の刺戟により強ひて注意を集中し話に壓力をかけて無理に引きずつて行くが如きは實に嫌ふべき弊風である。そんな事をしなくとも今迄子供達はよく聽いてゐたではないか、自分もその程度迄は楽しく我を忘れて話し得てゐたのである。その状態に迄復歸すればよいのであるから、その時に生じた心の曇りを拭へばよい。ハツ

ミした途端、自己の小なるはからひで末技的な處置をせんませず、大きなおはなしの流れに身を托する心地態度になればよい。出るのではなく入るのである。力を入れるのではなくぬくのである。靜かに話中の情景を心に浮べつつ再び我が胸に歸り來れる「話の中の子供」に聽き「子供の心の動きとしてのおはなし」に自己を没して語つて行く態度に立ち直りさへすれば後は多くの子供達の創り出すおはなしの清流に楽しく遊び續ける事が出来る。話者は我が力によりて語るにあらず、この清流を身に受けて我ながら不思議な程外は靜かに柔らかく内は生氣にみちみちて語り得るのである。話中に觀る子供の姿の格別に輝いてゐるのも、この大きなおはなしの流れが話者を語りしめ子供達を聽かしめてゐるからであると思はれる。一度この清き流れを呼吸せる話者は、吾人の如實に讀者に傳へむと欲する「子供を信じて話す態度」に立ち「聽く子と俱に一心に」語る様になる

であらう。「子供他力」もいふべきこの境地が、如何に自力のみによらむとする話術とその趣を異にせるか。次に御紹介する保育科生の「おはなしの處女經驗」の一節が明白に示してゐる。

× ……この時も、參觀していらつした先生・實習生の方々の顔は私には見えなくなつてしまつた。唯子供達の熱心な眼が、お話の調子に従つて近づいて來たり遠くなつたりする事のみが感ぜられた。子供達が遠くなる時は丁度横を向く子供が目につく時である。けれどもそれをさうか仕様と思ふ間にすぐ子供の熱心な目が近づいて來て私を引入れてしまふ。先生がいつもおつしやる子供達の聽かうとする力によつて話は出来るのである事が深く感得された。

× 教聖ザルツマンは、教育者の受くる報酬の中「自己の醇化向上」を以て最大最深の恩恵なりとし、教育に従事する者が一度教育を通じて爲さるゝ自己の醇化向上を我が身に切實に體驗感得するに至らばその他の報酬の厚薄多少は問題にならぬ有難き消息を語つてゐる。外面的制度上からは資格を得て教壇に立つのであるが、その擔任せる兒童達の教育者たる資質は師弟の眞實の縁が結ばれ兩者一體となりて感

孕する裡に自得され體現さるべきものである。たゞひ就任當初はその負荷の重きに任へ得ざる教師も實にその兒童達の天真の信を受けてこそ正しき師弟の關係に立ちその間をつなぐ一つの線を通ずる清き流れに淨化せられて甦めてその兒童達を擔任する師として新生する。思ひをこゝに致す時、前に紹介せるおはなしの眞景が實に此間の消息を語る縮圖の如くに觀らるゝのである。「横を向く子供」が話術によらず話者聽者一體の世界の中に自己の安住の地を見出してその中に歸順する自然にして必然の趨勢は前述の情景より何人も想到する所であらう。一組の中の特殊な性癖の子は「こゝしたらよいであらう」と日夜苦慮せらるゝ先生の力に餘る難事である。「この子がよくならねば我はその師たるの資格なし」と自己の無力を歎ぜらるゝ先生に、いつに變らぬ純なる信賴の眼を向ける多くの兒童達の清き姿が我が心の動きと對比されて鮮かに映じて來る。意識せざる幼き友情の發露は、家庭訪問に當りて母親の無理解を責むる教師の心をその境遇への同情に基く協力へ轉せしめ、子供と俱なる生活の裡に感得せらるゝその子その子の心の動きは智的な個性觀察を一新して幼き心の花の色香に日々新なる保育の道に進みゆく懐かしき思ひ出の記となる。子供を觀るこいふことは子供と同じ世界に生きその世界の中に淨められたる眼を以て觀るこゝであるこゝがわかり、自分から

離して子供の性癖を外から他と比較せる類型に於てのみ見やうとせずその心根を温かき慈眼に攝取し洞察する様になる。

この眞の觀方からその子は一段と我に近づき其の子と俱なる生活の紐帯は一ぱいに擴充せられてお互を一體に結び付け、こゝに方法以上の新らしき「大和」の世界が清らかな曙の如く我等の前途を照す光明として輝き出づるのである。
(一三、七、二六)

本會の新刊書

廣告欄の通り、「觀察の實際」「幼稚園新唱歌」「新體幼稚園唱歌」の三書を新刊致しました。いづれも、それらの方面に於て、待望せられてゐたものばかりです。出版後既に多數の歡迎注文を受けてゐますが、三冊とも、幼稚園教育の内容を豊富にする上に於て、期待に添ふことを信じます。

昭和十三年九月

日本幼稚園協會